

荒

就鳥

第十三号

協田大学

書道部

卷 頭 言

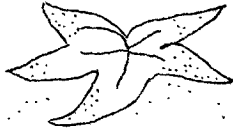
自己に絶望し、人生に絶望したからといって、人生を全面的に否定するのはあまりに個人的ではないか。人生は無限に広く深い。

われわれの知らないどれほどの多くの真理が、美が、あるいは人間が、かくれているかわからない。それを放棄してはならぬ。自分中心だけで考えると狭くなるものだ。その狭きからくる人生否定を私は好まない。

自殺とは人間的能力への窮極の確信なのです。ある意味で野心であり、虚栄ですらあるかもしれません。一種の自己讃美ともいええますまいか。

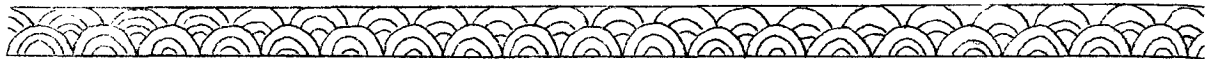
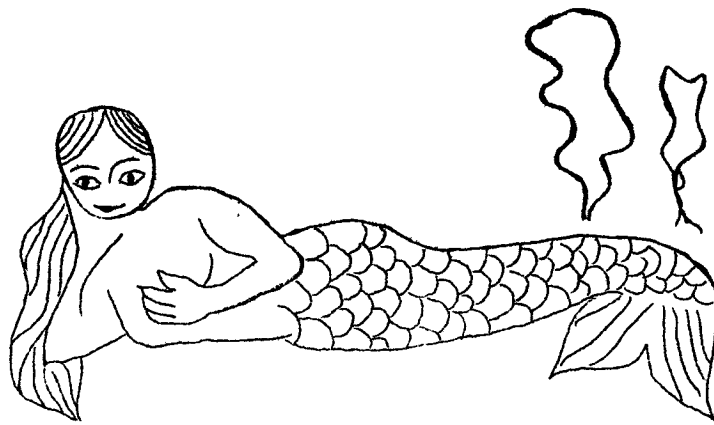
決して自己放棄ではありません。

絶望は厳密に言うなら自殺の希望すら失うことではなからうか。自殺する能力を疑い、その能力を否定するものではないか。同時に第二の自己形成の希望をも否定する。ありとあらゆる希望の否定 人間にはここまで絶望しうる能力があるものなのだろうか。



目次

近況報告	十兵衛	母	福岡大学入学と書道部入部と現在	三年たつて四年目	私の下宿	書道と私	アルバムから	無題	あじさいの花は枯れず	表具について	目次	巻頭言
人二重益 菜保子	法四 野小生 周作	法三 西村しのぶ	人一 堤 知江	商四 池田雅孝	商三 園山辰夫	商二 福島敏行	法卒 竹下 倫	商一 相場信義	法四 松嶋幹夫	経四 本園義雄	2	1
19	18	17	16	13	11	10	9	8	7	4		



私の愛読書	商二 大坪 秀憲	20
書道部に入学して	経一 本村 隆徳	21
私のサークル観	経三 岩切 題吾	22
常人の鬱積	法四 松元 幹倫	23
福岡大学書道部規約		26
役員名簿		29
編集後期		30

「表具について」

経四本 園 義 雄

あちらこちらの展示会をのぞき作品以上に(?)表具の技術を見学にきましたのでそれをまちがい多いと思えますが述べたいと思います。用意するもの①ハケ(水はけ、のりばけ、長ばけ)、②のり(水のり……水にといたうすいのり、のり……水にとかないもの)、③ナイフ、④おもしろ(金属類は紙をまいておく)、⑤押しピン、⑥ふち木、⑦くぎ、⑧定規、⑨裏うち紙……厚手のしっぺりしたもの、⑩表装紙……あらかじめ作品の大きさに切っておく。

一 福大式ベニヤ板型

日本一安くて早い簡単な初歩的技術でつくられる方式です。

。市販されているベニヤ板を使います。

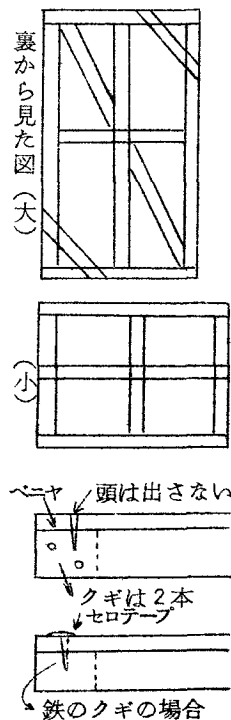
買う際は日にやけていないものを選んで下さい。(日にやけたものは色がにじみ出てきます。)

買った後に半紙を水で板に張りつけ紙がかわいた時点で色がでないかたしかめて大丈夫なものを使用して下さい。

。パネル作り

ベニヤ板でパネルを作ります。

作品の大きさに合わせてパネルを作ります。裏に組む木はまっすぐなしっかりしたものを使って下さい。



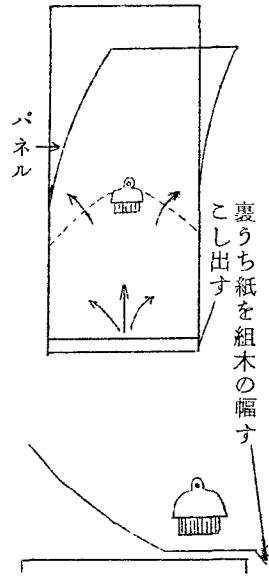
ベニヤ板から裏に組んだ木にクギを打つ時は、今は鉄製でないクギがありますからそれをつかって下さい。鉄製の普通のクギですと赤サビが出ます。また鉄製ですとその上にセロテープをはらねばならず表装がしにくくなりますし、数度の使用に耐えかねます。

しっぺりと木を組まないと、水やのりを使用しますからでき上った作品がパネルごと大きく曲ったりそったりします。

。裏うち

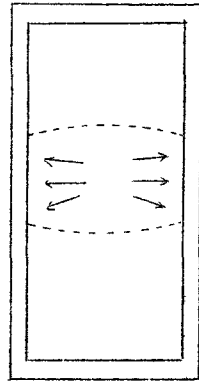
パネルができましたらその上にぬれた雑布でよくふいてゴミ等をおとして下さい。そうしますと、パネルの上はほんの少ししめった状態になります。市販の裏打ち紙をのせうすい水にといたのりをのりばけ(毛のぬげないしっぺりしたもの)を使い、パネルの手前から裏うち紙を張りつけてゆきます。はけはパネルの中心から外側へと運動させて下さい。空気を残さないように十分注意して下さい。パネルから組み木の幅

程度出しておいた部分を組み木にのりで張りつけます。



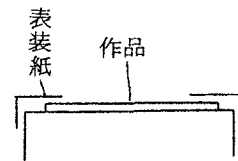
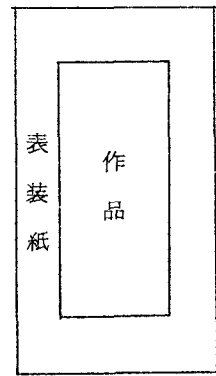
○作品張りつけ

裏うちが終りましたら少し時間をおいて余分な水を乾かし、全体ののりの状態を少ししめった状態になるまでまって下さい。よく乾いた長バケを使用し、作品二つに折ったら真中になる部分から半分ずつ片方からはじめます。バケの動かしがたは裏うちの時と同じ要領で動かします。その時空気がのこらないよう張りつけて下さい。



○表装紙張り・ふち付け

作品を裏うちしたパネルの上に張りつけ終りましたら表装紙を貼り付けます。



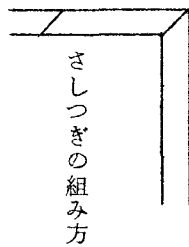
表装紙の裏に水にといかないのりを付けます。作品に少し重なるように表装紙を乗せ、パネルの角の部分から組み木の部分の幅程度出しておいた部分を組み木にはりつけます。その部分は組み木とよくつくように押しピンでとめます。作品と重ねた部分にはおもしろのせませす。そのまゝ全体が乾くまでおきます。乾きましたらふちをつけませす。

二巻き物

○裏うち

濡れた雑布でゴミをよくおとした台の上に作品を裏返しにしてのせませす。水にぬらしたハケを使用し、作品の中央から半分ずつ片方から台に貼り付けませす。ハケは作品の内側から外

角の組み方



側へと動かします。あまり水を多くつかわぬよう空気の残らぬよう注意して下さい。

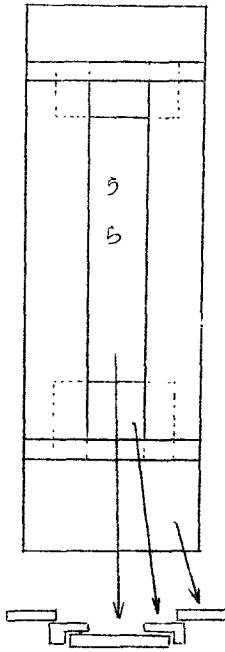
裏うち紙は下の方から順に水に溶いた淡いのりを付けた糊バケを使用し内側から外側へと動かし、なるべく水糊を多く使わないよう空気を残さぬよう張ってゆきます。

紙を貼った作品をぬれているうちに作品を内側に貼り付けます。裏うち紙の作品から少しはなれた部分に水にといてない糊を周囲につけます。十分に乾いたら作品と糊付けにある部分との間をナイフで切り、作品を取り出します。

作品からはみ出た裏うち紙は定規をあて、ナイフできれいに切り取ります。

。表装紙貼り付け

裏うちした作品の上・下の部分に金箔をほどした紙を貼り付けます。作品の長さで金箔をほどしたかざり紙の長さを足した長さの表装紙を横に貼り付けます。上・下の表装紙は作品の幅と横に貼り付けた表装紙の幅を足した幅の物をはり付けます。



。二度目の裏うち

表装紙を貼り終りましたら裏向きにして台にのせ、最初の裏うちを同じ要領で裏うちをします。その際表装紙の後で軸木に貼り付ける部分はおり返しておき裏うちします。裏向きにして、裏うち紙の端に糊を付け、紙の台に貼り付け十分かわかし、作品と糊の部分の間の裏うち紙の部分にナイフをあて、作品を切り取ります。

。軸木

二度目の裏うちの際、おり返した表装紙と裏うち紙の間に、表装紙と裏うち紙に糊をつけ、軸木をはさみ貼り付けます。

三 本表装

。台について

十分乾いた縦・横のまっすぐな木で作品の大きさの台を組みます。

。その台にバラフィン紙を端の部分に糊をつけ貼りつけます。張り終ったバラフィン紙が乾くまで陰干します。

。十分乾いたらその上に中紙を貼ります。少し湿らし端の部分に糊をつけ貼ります。

。その上に少しぬらした表装紙を貼りつけ端を糊づけにし、組み木に貼ります。陰干して十分乾かします。

。その上に裏うちした作品の裏に少量の水を引き、端に糊をつけ作品を貼ります。

「あじさいの花は枯れず」

法四 松 嶋 幹 夫

この流転きわまりない俗世に生を受けて二十年、小生、一体何の爲に生きろうとしているのか。生きるということは、今の俺にとって何であるのか。その神秘的な輝きを持つ、生の意味をも考えず、現に、たゞ、生きているのみではないか。がしかし、生と死の問題を考へるときに俺は、いつも、尊敬してい、又興味ある人物である大宰治の事を思い出す。県下でも屈指の大地主の家柄に生きた彼がなぜ、あのように人生について、悩まねばならなかったのか？ そして、何が彼を死に追いやったのか？ 彼の一生を見ようと、純粋に人間らしく生きたいが爲に、現実の汚れた社会（体制）に心の目を向けた時、耐え切れず、自ら死を選ぶことによつてそれを超越しようとしたのではないかと……彼の苦悩にあって、決して彼のものだけではない。なぜなら生は不変である、死はだれも超越することができないからである。（大宰治もかなり危険な考へ方をしているかもしれないが……。）だが、小生にとつて彼の考へ方をそのまま受け入れる俗物でありたくないからである。今の俺はもう人間としての何の余裕もなく、何の誇りもなく、枯れ木が害虫にむしられ倒れるが如く、なにも

抵抗せず動物の本能をもつてたゞ、漠然と生きているだけであつて、又、ただ人に遅れてはなるまいと思つて、ただ同じ所にとどまっていながら、生きているかのように錯覚しているだけである。あたかも、人間という名のペールをかぶつて。ある時、俺は、神の存在、人間の人間たる暖かい心さえも信じる事が出来なくなつた、自分ほど情けない人間はないと思つたが。それには、それ相当の理由があつたからでもある。そのころ俺は、人間をやめてしまいたいくらい思つたこともあつた。がしかし、人間として、人間らしく生きていくには、人を信じなければ生きて行けないのだとも思つた。素朴なもの、自然なものを愛するようになったのもこの頃からである。この頃まで、私は眞実たるものは、この世に一つしか存在しないものだと思つていたからである。しかし、眞実という言葉はもっと深い何かを持っているという気がして来た。それが何であるのか私には解らないが、眞実とは、型の決まつたものではなく、また一つしかないものとはかぎらない。それは、それぞれの人の心の中にあるものかも知れないという気がして来た。なぜなら、人間として眞実を知りながら嘘をつき続けることに、何のためらいも感じない人間はいないはずであると思いたいからである。「自分に忠実に生きる」、「自分が自分に生きる」というと、我がまゝに生きるというと思つけれど、眞実に生きるというのはこのことではないだろうか。まさに、このことが自分自身の「眞実」ということではないだろうか。

無 題

結局、人間は自分自身の可愛らしさの為に生き、そして、又死んでいくのではなからうかと。

俺は、この世でおふくろが大好きである。俺は、この世の中でおふくろを一番愛している。だから、俺はおふくろを悲しませたくない。俺が、おふくろに取つて素直な良い子であればおふくろも喜ぶであろう。だが、おふくろよ悲しまずに泣く事なく、良く聞いて欲しい。俺は確かに、おふくろの愛情を今感じている。だから、おふくろがいつもいうように、真面目に授業に出て、成績を良くし、良識的な人間になる為に勉強しなくてはならないのだ。友達も作らず、酒も飲まず、麻雀もせず、遊びにも行かず、女も作らず、自分がやりたくもない勉強をあたらずさわらず、俺がひたすらに、そのような生き方をする事を誰よりも期待しているだろうが、がしかし、おふくろの言う勉強とは何なのだ。俺が友達と酒を飲み歌い、雀荘で麻雀を打ち、中洲を闊歩する。当然授業に出ない事もあるだろう。だがおふくろよ、俺の人生にそれは必要だ。ただひたすら成績のために勉強し、欲する事をやらない、それは、俺にとっては無意味にすぎない。おふくろは言うだろう。又他の人も言うかも知れない。お前は本当の大馬鹿者だと！それなら馬鹿は馬鹿なりに言ってる。これが馬鹿のやる、とか！お前らは一体何の為に生きているのかと？『誰れぞ知る流れ行く我が恋の涙にぬれし七変化かな』と言いたそうに、あじさいの花は今日も枯れず裏通に埃かぶって咲いていた……。

商 一 相 場 信 義

今、俺は気まずい思いをしている。なぜかという、この原稿を明日までに提出しなければならぬからだ。八尋先輩が言われたように、書道部に対して感じたことを書こう。

大学生活も、もう二ヶ月経って、今は練習していても額に汗にじませる季節となり、墨の臭いもかき慣れて、打ちこんでいる俺。窓には西日がさし込んで、筆の影を長くしている。

前よりも練習時間も、長くなって皮肉にも、まるで日の長さと同様に練習時間の長さが比例しているようだ。

この二ヶ月間に、書道部といういかにも「風流なクラブにはいなかったな」と友達にもいわれている。俺はその次に返す、ことばは「書道はイイヨ」という。そうすると相手は暗示にかけられたように首を縦に振ってそうだなと素直に答える。

そんな簡単な理由で、入部したのではないが「お前は字が下手クソだ」と先輩であり、いどこである安河内さんからも何度となく言われ、自分でも認識しているためだ。

主観的なことかもしれないが他に加えていうと、社会に出ても字というのは使うことが少なくない、一生字に接すると思っ

たから入部したようなものである。

忘れられないことが一つある。それは親睦会で能古ノ島のアイランドパークの帰り、俺と四年の松島さんは、みんなを出しぬいてマイケロバスで船着場まで行った。バスからながめる海のけしきを見て、久しぶり隋ればれとした。途中、連盟の奴等に来て少し気がひけた。

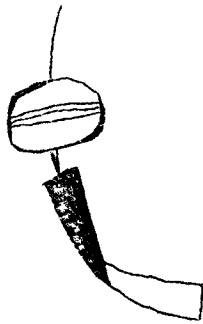
海の青さと、疲れ果てゝ歩いてゐる姿を見るときかにもこっけいな感じがした。

二ヶ月間にわかったことは先輩の気前のよさである。先輩に自分はポケットしていると謙虚にも自分のことを話してくれた人がいた。だが、俺が知っている先輩には見当らないようだ。

ここで書道のことを少し、そう書道のよさというのがまだ、今ではわからないが、自ら筆を動かす、わかるうと努める精神が大なることだと思ふ。

石 先生も、書がわからないとずっと前言われた。

俺も、今はわからないのが当然であろう。だが、今わかってゐることは、先輩の味というものを、このかた生まれて文学のクラブに入ってしまったような気がする。



「アルバムから」

法卒 竹 下 倫

書道部生活を振り返ってみようとアルバムや未整理の写真を出してみた。

その写真の一枚一枚を見てみると動かない。それでも頭の中でその前後が動きを伴ってかなり鮮明に想い出される。それらの自分の作品の写っているものゝ数枚を見ながら、それに関してエピソード感想などを述べる。『九成宮』自分の書いたものが初めて軸になって、「こうして見るとちょっとたものだ」と当時は思っていたようである。しかし、現在見ると整然としてなく、楷書作品としては致命的である。

『張猛龍』前の『九成宮』の失敗があったので「APS展では」と、かなり練習したように覚えている。その際、H先輩から「おまえは線が弱い」と、刀を逆手で持つように筆を持たされ、『張猛龍』を言かされた。このとき「さすがに書道は習字とは違んだなあ」と、感心していた。

『争座位稿』O先輩のアドバイスのお陰で自分なりに気に入ったものが出来た。『争座位』によって、濃墨、羊毛を使って書く面白さを知った。それから何回かこの法帳を練習したが、紙は

連落サイズの方が『争座位』のムードをよく表わすようで半切は向かないように思えた。この作品を書いた頃から、「自分はこんな感じのものが好きなんだなあ」と考えたりした。

『祭姪稿』この作品は変わった場所です。練習したのを想い出す。先輩が夜警のアルバイトをしている店の宿直室に押しかけて行って書いた。

十時頃までは先輩も真剣に「あそこが悪い」「そこはあーしろ」と批評してくれていたのですが、一休みのつもりで夜食を買って出て、ついでに酒も買って来た。この酒がいけなかった。食べて飲んで間もなくすると、酔ったのか、先輩は眠ってしまった。それで仕方なく独りで朝まで書き続けたのである。そのときの夜明けは清清しいなどと云うものではなく頭がボンカリして「よく書いたなあ」そんな満足感だけだった。途中省略して……。

『造像』これは皆さん御承知の如く、例の写真のあれである。法帳を見ていて自分の作品を白黒逆にしてみれば面白いだろうと以前から考えていた事であった。最後の七瀬祭だからと思っただんなものを出品した。後でその作品を見ていて同じものなのに、白と黒が入れ替わるだけでずいぶん感じが異なる。

それで現在使っている法帳と本物とを比較出来れば何か得る点があるかもしれないと考えてみた。

古典のコピーばかりに触れてみるのではなくオリジナルを見る事によって本当の古典の良さが解るのではないだろうか。なんだか、

早いテンポで自分だけ分って楽しんだようだが、これでアルバムを閉じる事にする。

「書道と私」

商二福 島 敏 行

私が書道部に入部した動機というのは、まず第一に字は人が一生書き続けるものだからうまいと、何かと有益だということ、そして第二に得意でない書道というものに取り組んで見て知かしら自分の人間成長に役立つのでは、という大それた考えからなのである。それまでこれっぽっちも興味を持っていなかったし、またそんなものはおよびでないと思っていた書道ですし、はっきり言って字のへたくそな私でしたから、書道部に入った当初は、同輩たちと一緒に練習することで、かなりの引け目（コンプレックス）を感じながら、自分の書いた字に我れながら嫌気が差して愛想を尽かしたものでした。しかし日が経つにつれてへたはへたなりに、(going my way)で行こうという気持ちになり、そう考える方が気が楽でした。そうして元来くそ真面目なこの私は毎日せつせとクラブの方に足を運んで練習に励んだのでありました。

それから夏休みには、錬成会、夏季合宿があり、その合宿の練習の厳しいこと、朝から晩まで練習、練習、また練習の猛練習ぶ

り。腰の痛さと自分の思い通りに字が書けない苦しさで、私はこの時はかりは書道の道の厳しさというものを身にしみて感じさせられました。そして錬成会以来ずっと一年の間は、その一見、間が抜けたようできりりと締りがあり、堂々として暖かみのある字に心引かれて（これはちょっとオーバーかな？）私は、晉祠之銘ばかりよく飽きずに書いていました。やはり書というものを通してその作者の人格に触れ、私自身もそのような人間になりたい。またそんな字が書きたいという願望から自分の性格に似た、あるいは全く正反対の『晉祠之銘』という書に引かれたのかもしれない。

そうして春休みには、年間行事の最後の締め繰りである春季合宿が行なわれ、サークル論について出される先輩たちの意見に耳を傾けたり、また、ない知恵を振り絞って意見を述べたりで、いろいろと非常に勉期になった合宿でした。

このようにあっという間に私の一年は過ぎて行っただけで、その一年間というまばたきの瞬間に得たもの、学んだものは大きかった。そしてそれらは、単なる書道という世界からよりも、書道部というサークルの中で、書道を通じた人間同志の繋（先輩や同輩）からの方がより大であった。しかし私はいつもその人間関係の難しさに悩んで来たし、また現在、如何に生くべきか。今日という日をどう生きて行くかということを常に考えながら毎日を過ごしている私なのです。

何だか、始めから最後まで全々まとまりのない文章になりましたけれど、そこは何せ筆無精の私ですので何とぞお許し下さい。

題。私の下宿

商三園 山 辰 夫

本籍地は「出雲名物荷物にならぬ、聞いておかれ安来節、アラ、エツサツサー」と言う安来節民謡で有名な、島根県は松江市雑賀（さいか・と読む）町八二五、松江は古くからの城下町であり、水郷・史跡・文化観光都市として、落ち着いた情緒をたゞよわせている町であります。自分の故郷の紹介はこの位にしておきまして、さて、私がこの松江を後にして、博多と言う未知の大都市の雑踏の中で、かつて経験のない下宿生活なるものを始めたのが、今から二年と三ヶ月前。現在の下宿は、一年前、友達で紹介によって入ったもので、過去二度目の下宿であります。現在の下宿生活は述べてみる前に、元、住んでいた下宿の事について、少し述べてみましょう。私が下宿屋に着き、家主さんから部屋に案内され、その中に入った瞬間、それは回り中がベニヤと言う安っぽい合板で張り巡らされ、微かな光りの差し込む窓と、ちっほけな押入れの付いた三畳の部屋、いや小屋と呼んた方が良かったのかもしれない。そして、他の二人の下宿人が二年生と三年生である

と聞かされた時、今迄の寂しさが、グッと込み上げて来たのを憶えているのであります。しかしこの様な気持ちも始めのうちはともかく、協同生活をして行くに従い、次第に先輩達とも親しくなり、金の無い時などよく天神とか、中洲の方へ飲みに連れて行ってもらったものであります。これは現在自費で屋台へ飲みに行く時の回数よりも多かったのではなかつたらうかと思うのであります。そして何よりも酒の質が今よりも高級であつたのであります。又話がズレますが、この頃から一人で天神とか中洲の方へ出て行く様になりまして、最初の頃気付いたのであります。町を歩いている女性が皆美しく見えたのであります。しかし現在は悟つたのであります。当時私は近眼のくせに今の様にメガネをかけずに町の中を歩いていそのであります。しかし近眼のせいだけでなくて、少々欲求不満であつたのでしょう。又話を元に戻しまして私の下宿に友達を連れて来る度に、「おまえの下宿はなんかノこげえーな所によお居るなあ、早いとこ出る出る」とよく言われたものであります。実際部屋の狭さはもとより、夜中静かになり友達と一緒に寝る時など、なんせ仕切りがベニヤ板一枚なもので、隣りの住人が何をしているかが、まるで手に取る様に分るのであります。おまけに下宿全体が半地下であつた為、夏の盛りなど、ムツとして、とても居たゝまれない状態であつたのであります。今迄旧の下宿の悪態をついてきましたが、これでも当時は私にとつては、唯一の城であつたのには変りなかつたのであります。

現在の下宿は先に述べた通り、友人が元の私の下宿を訪ね、見るに見かねて紹介してくれたものであります。下宿人十名、その内訳、三年五名、二年二名、一年三名と言ひ構成であるからして、私達は親分であります。部屋は四畳半ベッド付き、ベッドと言つても畳一畳分だけ浮き上がった代物でありますけれど、一年と三ヶ月前この下宿に移つた当初は、何よりもまず、部屋の広さに満足感を憶え、そして、日当り、風通しも抜群に良かったと思つていました。が、さあ今はどうでしょう。人間という者、現実の環境に満足し、慣れてしまうと、よりそれ以上のもの欲しがる恐ろしい現象を持つた動物であります。構成人員に先程述べた人数であります。下宿内での人間の出入りが非常に激しく、終りには所有物が自分の物であるか他人の物であるか分らなくなつてしまふ時があるのであります。その汗えたるものが、各人家から郷土の名産や菓子類を包めた小包が届いた時などのも二日も持たない始末でありますから、いかに食物に飢えているかがお分かりいただけるでしょう。この様に慌しい下宿であります。誰かの誕生日が近づいて来た時など、その当事者は前もって宣伝をします。ので、いやがおうでもプレゼントをしなければならぬと言つた具合で、無い金をはたいて、わずかばかりの贈物をするといい、一面人間的なところもある訳であります。又たまたま皆が揃つた時など、一升ビンを囲み、クラブの事、プライベートな悩み、あるいは人生論等を夜が白む迄語りあかすといつた様に、非常に家族的な雰

困気する下宿であります。ですからして、私は現在の下宿には、まあまあ満足しているのではないかと、思っているのであります。

三年たつて四年目

商四池 田 雅 孝

大学に入って三年と二ヶ月。早いものです。学校へ行くと、まだ入学当時の先輩等が居て、「あー、やっと授業が終った。」と、ドヤドヤ部屋に入って来る様な気がするんですよ。

私も、もう四年、本当に早いものです。最初に来た時、九階建ての図書館兼研究室に驚きました。北九州の田舎（その時はまだ、家の前にも田んぼがあったんです。）から出て来たタコ坊主もこの「ドデカイ」ビルに正直言って面くらったんです。それに、博多駅から遠いのに感心しました。ホント。入学式がこれまた驚き、時間に間に合う様に来たのですが、五千人収容と言われる会場に入れなかったんです。係の人が「もう入れないからテレビを見て下さい」とマイクで言っていました。でも、せっかく来たのだからと思つて中に入ったんです。やっぱり、学生で中はいっぱい。やっと入口の横の壁にへばりついて立っただけです。もちろん前はまるっきり見えません。わずかに、前に立っている学生の頭越しに演壇に飾ってある日章旗が見える程度でした。だか

ら、総長や学長の顔など、一、二年たつてから拝見させてもらつた次第です。その時の学長挨拶等で冗談を言つてはくれたが会場の学生達は前方半分ぐらいが笑つてる程度で、私を含めた、後半分の学生はキョトンとしました。只、驚いた、この一言に尽きました。学校が始まって、部員勧誘、私も恐い目に逢いました。運動部の人々が半ば脅迫めいた様に、勧誘し、私も言われました。自分自身、足がすくむ思いがしたんです。それで私は早く入部してしまおうと、学会館の書道部室をたいたわけです。記憶では確か、尾形先輩（45年度卒）がおられて一号館前の受付に行く様、言われました。翌日、教えられた場所に行くと、森先輩、多田先輩（共に45年度卒）が黙つてすわつておられました。申し込み用紙に名前を書いた時の安心感、ホツとしましたね。

対面式の日、当時はペン部門（現在のペン習字同好会）と一緒に、初めに両方一緒に総会があり、後に毛筆部門は日本間道場で改めて自己紹介があったんです。自己紹介で「私は北九州出身で」と言つたとたん「ワッ」という歓声が上がつたんです。その時は意味がわからなかったんですが、もの一ヶ月、いや一・二週間もたつと、そのわけがわかつたのです。名声高き、北九州組が存在していたのです。なにしろ、この連中、賑やかこの上ない強者揃いで、行き帰りのバス、列車の中ではこれら連中より、まわりの乗客の方が喜んでいる始末。なんとまあ御立派な事。この日の帰りに、忘れもしない、北九州組の荒っぽい歓迎コンパがあったん

です。名付けて「うどんコンバ」。

列車の時間にあと七、八分という時に、うどん屋に入って、腹ごしらえをして、列車に乗るのです。うどんの汁の熱いの、店に入って出て来るのに五分足らず、猫舌の私はおかげで口の中きいに皮むけてしまいました。その時の北九州組の新入部員で通学は本園殿と私のふたりでした。彼の第一印象は「この野郎、人相悪いなあ。」でした。

書道部に入って、練習の時、書体の違うのに戸惑いました。それでと言っては悪いのですが、臨書中心でやろうと思っただけです。けど臨書ってむづかしいですね。

連盟の行事、部の行事には、この三年間ほとんど全部と言うくらいに参加したつもりです。連盟の親睦会、ダンバ（後輩諸君は、この事は御存じないと思います。私達が一度経験しただけで中止されましたから）、練成会等、部では合宿、七隈祭、西日本高等学校樟葉大会、クリスマスパーティー等、どの行事にも何かが何らかの形で残っています。

入部早々から通称三馬産なるものを結成してワイワイ騒いだり、二年の時の新入生歓迎ピクニックに、朝四時から、遠藤氏宅より拝借の米一升五合で三時間かかって握りめし計四十八個を作ったり、全く人様から見れば馬鹿な事と思われましよう。しかし、ひとりぐらい、こんな馬鹿が居ても良いではないですか。どこかで私は偉い人だと思ってる人の為にもネ。

また味の散歩も楽しいもんですよ。と言っても私のは麵類専門なんです。まだ数は少ないですけどネ。一例では天神では名店街因幡うどん、博多駅の大福うどん、筑紫うどん、ラーメンは六本松の潘翠軒でな具合。まあ、これは私の好みの問題ですから、みさんにはどうでしょう。旅行をすれば、楽しい事や失敗談もありますね。私も失敗しました。金丸先登、江上先登（共に46年度卒）と一緒に山陰旅行した時に、出雲の立久意峠に行つてバスの中にギターを忘れたんです。あわてましたね。すぐ営業所へ電話で折返して来るバスを待ったんです、ハイ。ちなみに、翌日は、金丸さんのサンクラスが行方不明、翌々日には江上さんが鳥取砂丘でクシとサンクラス、共に手元にもどりましたが、行方不明と云った調子でした。豊岡という所で警官に不審人物といった目で見られ、京都へ行く途中では列車の中で三人共、赤ん坊に馬鹿に負け、でも楽しい旅行だったんです。出雲で宿を捜して二時間、夜の町をさまよひ、松江で夕食のかわりに梨を三個、腹がへりましたよ、この時には。また、二年の時矢野先登（46年度卒）の家へ遊びに行った時が苦労しましたね。丁度、台風が過ぎた時でした。最初予定したコースが駄目で、岡山から高松に渡ったんです。下関から岡山まで立ちずくめでした。疲れましてね、ホントにね。岡山から今治の先登に遅れる旨至急電報を打ったんです、すぐにね。しかし、今治に着くと先登の影は見えない、夜の十時ちょっと

と過ぎでした。一瞬、非常な不安を覚えましたよ、なにせ、家がわからないんですから。でもなんとか捜さなくてはと友達の話などを思い出して何とか捜しました。家に着く時はホント、安心しましたね。一時はどりなる事かと思いましたが。至急電報は、翌日の昼過ぎそれも夕方じゃなかったかな、着きました。電報より私の方が速かったんですね。この旅行の時大阪まで足を延ばして万国博を見て来て、帰りに教育大の女の子（尋道部員）と知り合っただけです。この時は、楽しかったというよりもおかしかったなあ。

学校生活の中で、二年の時、私も下宿した事があるんです。正確に言えば、一年の十一月二十三日から二年の終わりまでです。下宿した切めは、新築間もない時で部屋は六つ、しかし、入居しているのは私ひとりでした。夜なみ、退屈だったし、淋しかったと言った方が正しいかな。その下宿（経営者は同じなんです）の先輩等が良く面倒見てくれました。うれしかったんです、ものすごく。うれしかったと言えは、二年の後期の試験中に、私の頭の出来の良さを心配して、保友や公友、それに松元の三君が、陣中見舞に来てくれたんです。その時は本当にうれしかったんです。

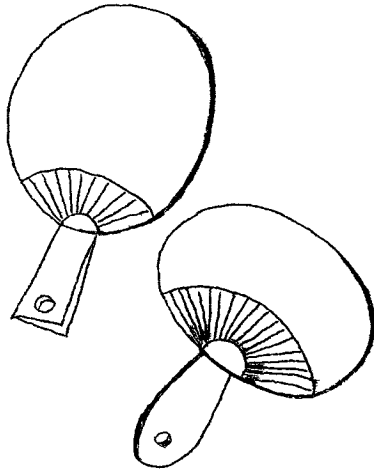
「ありがたいなあ」とつくづく思いました。及道の下宿に行ったり、来てもらったり、みなさんも大いにやって下さいよ。楽しいもんです。そして、三年からはまた通学。朝の早い時はちょっと疲れますが、また違った味もいろいろですね。面白い事に電車に乗る時、いつも同じ場所に乗るんです、人も私も。たとえそこだけ

が混んでいてもです。不思議ですね、言位というのは。それに、居眠りしても、降りる駅に近づく、おのずから目がさめる、これも、不思議な現象です。中には寝過ぎられる方もいらっしゃいますが。私も一度経験しました。もっとも、終点まで行っても車掌に起こされるまで寝ていたという豪傑まで居ますがね、我が部にも。そういうわけで大げさに言えば学生の授業が何限目からで、いつが休みかという事もある程変われる様な気がしますね。それ程、一つの車両の中は同じ顔が揃うという事でしょう。

ところでみなさんは大学に何を求めますか。私自身、偉そうな立派な事は言えませんが、最初は字補に、まだ学生服が着たからたのひととの接触と言いますか、多くの人に話してみたいと思っただけです。そして、今も大して気持は変わっていない様です。最上高等学校の大学からすれば、人間をあまり重視してなかった私は、大学生たるに失格でしょうね。が、私自身には、大いにプラスになったはずですよ。本当は、プラスの面が何であるのか自分でもはっきりつかめないんですけれども。でも何かあるんです、何か。最後に、何だか面白いとして、古くさい様ですが、対面式の時にも言ったんですが、この大学二年間で、字補だけでなく、社会の人間としての礼儀を身につけていたのだとたいへんです。最終的に人間を見られるのは礼儀や行動の責任です。言葉の責任に大きなウェイトがかかってきます。人と人との二強か人生である以上、礼儀は無視できません。先輩や同輩に対して、同じ部員としての気

安さもありましようが、親しき中にも礼儀です。卒業された先輩から「先輩が言う事を聞かぬ、先輩を先輩と思っていな様だ」という事を聞かされた事がありました。私もそういう経験があります。そうしてみると歓迎コンバや対面式の際によく「先輩達の言う事を聞いて……」などと言う言葉が空々しく聞こえるんです。私が四年だから、言うことを聞けと言うのではありません。そういったちょっととした心使いが欲しいのです。私もまだまだ勉強が足りません。だから、機会ある毎に身につく様努力しようと思っております。礼儀や言葉ひとつで大学四年間無駄にしては何にもならないですよ。人と人のつながり、もって大事にしましようよ。

私も、もう四年。早いですよ、四年間は。



福岡大学入学〜書道部入部〜現在

人一堤 知江

私にとって「福岡大学」とは第三の希望、要するに、すべり止めであった。第一、二の希望の大学を受験したが、そのどちらもすべり、仕方なく当大学に落ち着いた次第であった。第一希望の大学入試に失敗したショックがまだ癒えないままに福岡大学の入学式に臨んだ私であったが、ただただ、福大のマンモスさに圧倒されるばかりで「早くこの組織に慣れなければ……でも、いったいどうすればこの組織の中で四年間も自己を見失わないように過ごせるだろう」という気持ちでいっぱい、入試失敗のショックなんか忘れていた。しかし、大学という組織に慣れ始めてきたころ、そのショックが、また私のしかよって来たようであった。なるべく、それから先のことを考えようとしていくつもりであったが……。

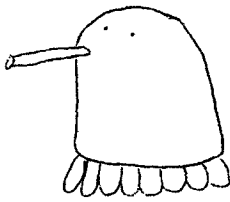
そうこうしているうちに、誰からも何かクラブに入った方がいいと勧められ、自分でも高校時代のクラブ内における人間関係がものすごく今の自分の為になったと痛感していたので、そういう気持ちになり、ためらわずに「書道部」に入部した。しかし、一抹の不安がなかったわけではない。高時の時、大会前の練習だけ

「母」

法三西村しのぶ

それもいやいやながら出かけていくくらいの私であったから、果して四年間も続くであろうかという疑問があったし、「生兵法はけがのもと」程度しかやってなかったため、かえってそのマイナスの面が出てくるのではないだろうかという心配もあった。しかし、実際に日本問道場に入ってみて、皆と練習していくうちに、そんなのはとりこし苦労だとわかった。そして、自分で決めて入部したんだから、石にかじりついてでも四年間頑張ってみたいと思ふ。それにしても、女子が少ないのに驚かざるを得なかった。高校時代、クラブ員は女子ばかりで、男子の入部を相等待ったが無駄だった。それに、大会とかに行っても女子の方が多かったし……。だから、男性の方が練習されているのを見るのは興味深かった。そして、つくづく、やっぱりいいなと思つた。

現在の私の目標は、早く先輩の顔と名前を覚えることである。そして現在、いや、今からの私の悩みは通学時間の問題である。クラブのない日は問題はないのだが……。しかし、出来る限りいっぱい、いっぱい時間を有効に使おうと、心がけていくつもりである。



母を見ていると母ははじめから母ではなかったことに気づき、慄然とする。

母を見ながら、いつのまにかその背後にある、ひとりの人間の半生に打たれている自分に気づく。

母は「母」と呼ぶにふさわしいひとりの女だ。

それは「母さん」でもなく、「おふくろ」でもなく、まさしく

「母」である。

厳しく、冷たく、それでいてその奥底に、耐えてきたひとりのも

つ慈愛がある。

苛酷な「生」を生きぬいてきたひとりのもつすばらしい慈愛がある。

母。ひたむきに生きてきた人生の先達。

私が「私」であるごとく、母もまたひとりの「私」であること。

ひたすらに己れの道を歩んだこと、

速く、生きてきたひとりであることをさりげなくその横顔に見せる母。

「十兵衛」

法四 野小生 周 作

馬鹿でとんまでおっちょこちょいで、およそ人を愚弄する形容の全ては彼の為に有る様なものでございます。まあ大体の人ならそんな続け様に言葉を並べられれば怒りもするんでしょうが、彼は自分自身でもそう思うんですから、怒りようもございません。そんな彼が何を思ったか例の調子でノコノコと書道部やらやってくるんですから、どうしょうもございません。だってそうでございましょう。およそ書道部なんて倶楽部は、そんなお人好しに努まる所ではございません。積極的という形容が、あつかましく、ずうずうしく、自分の欲望にまかせた利己主義が、堂々まかり通る世界でございます。それが平気で許される風潮が人によっては天国でもございましょうが、自分を馬鹿だと自分自身で決めている彼にとってもやはり彼等がかわれに思えたりするのでございませぬ。それはさて置きそんな彼の肌合いそうも無い世界の中に彼がそうまで身を投じた理由は実は彼の馬鹿さかげんにあるのでございましょう。まあ、俗に馬鹿の一つ覚えというのでございましょうが、今まで何となく生きてきた中で、何一つ満足を結果を得たものはございません。それも当然と言えば当然なことではある

あるんでしょうが。初めの頃は、何度となく、くやし涙を流した事もあるんですが、自分を馬鹿だと決めた時以来心に決めた事がございません。いくつもいくつもの失敗の繰り返しの中で、結果に期待せず、過程の中で満足するものをみつけるといふ事です。確かに言葉にすれば簡単な事ではございますが、人は皆多少の違いはあれヒロイックな感情を持ち合っておりまして、やたらの人に出来るものではありません。愚鈍な人間に特権があるとすれば、そんなものでしょう。彼は自分の字がまずいのをよく知っていました。例にたがわず、この事に関しても愚弄されることはあれ、生まれて一度もその事で人様からおほめを受ける事も無かつたし、いくら鼻真にみても、他人のよりも、まずいんでございませぬ。「字は読めさえすれば」と彼自身が思うんでしたら、この事は、いささかの問題にもならないんでしょうが、ノートを取る時も、日記を書く時も「うまくなりた」という願望が念頭にあるんですから彼にすれば、一身上の問題です。だから彼が書道の門をたいたのもうなずける理由はある訳です。一緒に机を並べて書く人だけど皆、自分とお話にならん程きれいな字を書くんです。決めた事とは言えやはり、いやなものでございます。そんなある日、彼にとって、一つの決定的瞬間が訪れるのでございます。それは、なぜだかは知らんですが、偉い先生がおいでになって、皆の書を視ようという事になりました。皆我先にと、腕前を、先生の目の前に披露するんですけど、そんな彼はただもじもじする

だけでございます。先輩にしりをつつかれてやっと差しでしたんです。「つまらんな、線がなっとらんよ。」たいていな言葉は覚悟はしていたんだけど、これ程決定的な言葉はございません。文字は一本一本の線の組み合わせでございますから、その一本の線がダメだと言われる事程、ガツクリ来る事はございません。その時彼は、卒業するまで、一本でいいから満足のいく線を書こうと心に決めました。彼は、何かにつかれた様に毎日毎日、線を書きはじめました。一本一本たんねんに。縦線も横線もいんじゃございせん。毎日縦線ばっかです。同期人は、半紙から半切、そして、聯落へとすすんでいくんですけど、かれは半紙に、半紙がなくなりヤノートの切れはしに、又は、新聞紙に縦線ばっかです。年何度か展覧会もありました。皆立派な作品を書くんですけど、彼には作品は書けません。しかしやはり皆提出と言う事になれば、そんな理由はぬきですの、半紙に何本も縦線を書いて出んです。それはお話になりませんので、一度も展示される事はございません。丸めて捨てられるのがおちです。しかし、誰かの気まぐれで、卒業前の展示会で、やっと展示されたことが有りました。珍事でございます。皆色とりどりの豪華な表装をほどこした、流暢な作品の中に半紙に書かれ縦線一本の作品とも言いがたい作品があるのですから。端っこではありましたが、多くの人の目にふれました。人が何を思ったか知りません。しかし彼にわかつているのは、四年間書き続けた縦線の中に満足した線は一本

も無かったと言うことだけです。

近況報告

人二重 益 菜保子

その一

自炊生活をする様になって、五ヶ月あまりたつ。

一人で夜を迎えたことのない私にとって、それは、不安、さみしさ、味気なさの連続であった。はじめのうちなどは、不眠症に悩まされ、物音ひとつでガバッとおきあがり、目をキラつかせ、いっせいに電気をつけまわり、影なき影を調べたものである。そんな日が続き、私にこれから、一体、一人で生活することに耐えていけるだろうか、真剣に考えこんだ。やがて、授業もはじまり、クラブ活動も開始、いやおうなしに疲れた、大いに疲れた。それからというもの、よくねむれる。一人生活をする事(自炊)あるいは、下宿、寮生活をする事は、確かに、私たちの成長過程において、大いなる糧となるものであるが、今の私のいつわらざる気持ちは、

「お父さんたち、早く帰ってこないかなあ……。」

その二

自由……？！？。

父が長崎に行くが決まり、母もついていけいけと強引に押し通した。その、もう五十を過ぎた父に、会社から疲れて帰って来て、自分で電燈をつけ、お茶を入れ、布団をとる、そんなわびしい思いをさせたくなかったから……。でもその気持ちの裏には、今までやった事のないこと、みたことのないもの、そんなものにぶつかってみたい、学生の間にはかやれないこと、すべてやってやれという気持ちがあったという事は、否定できない。

両親が長崎に出發した日、いつも看守人から見はられている囚人が……。いやいやこれは例が悪い。かごの中から、はなされた鳥の様にともうれしく、やっと自由になったという気持ちで一杯であった。

しかしいざ事にあたりとする時こんな事をしたら……。する必要はあるだろうか……。と。結局「よそう」という事になる。少くとも私にとって自由とは束縛の様な感じがする。一人だからこそよけいに自制しなくては、という気持ちがいっつも私の行動範囲を狭くする。結局無難な道しか歩かない私。

でもそんな調子では何も出来たものじゃない。「若いから失敗もする、でも若さがあるからこそ、又立ち上ることができる」「そんな言葉を何処かで聞いたっけ。

少しずつ自分の中から飛び出さなくてはいけない。そして正しく自由を謳歌したい。切に思う。

「私の愛読書」

商一大 坪 秀 憲

私は最近よく本を読むようになりました。今まで、たゞ単にたいくつしのぎで読んでいたのが、少し本格的になってきたのです。無知な事がいっぱいある私にとって、知らなかった事を知ることが、すばらしいことであり、喜びがあるとわずかながらも思えてきたからであります。良い本はいつの時代にあっても、その奥底にある作者の思いに、感銘せずにはいられません。

私は森鷗外の歴史小説が好きです。「高瀬舟」「阿部一族」「最後の一句」などいろいろありますが、どれをとってみても、微妙な人間の心理や、人間が人間であるがゆえに起きるいろいろな社会的個人的な葛藤がよく表わされています。

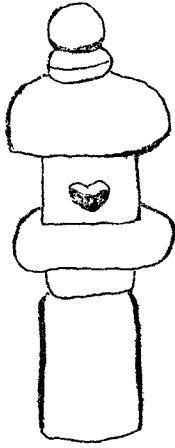
たとえば「高瀬舟」は、いずれは死ぬ運命にあった自殺行為の時、頻死の弟から必死になって、苦しみをとり除いてくれとせがまれる兄が、結果的には、自殺ほう助という罪をきて、高瀬舟で島送りになるのですが、月の光を浴びながら、微笑させたえてくれる兄、喜助の表情に、読んでいる私もほっとした安らぎを覚えるのです。また、島送りの付添の役人として、同舟している庄兵衛が、重罪を身一つにうけながら、今の境涯に満足している喜助

を知って、人間の限らない欲望をふみとどまらしてくるものは、

この喜助であると反省させられ、「庄兵衛は今さらのやりに驚異の目を睜って喜助を見た。此時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の顔から毫光がさすやうに思った。」と森鷗外は書いています。

この小説には「安楽死」と「幸福感」の問題が、主題として内蔵されていると習いました。すぐには結論は出て来ない人間としての大きな問題が取扱われていることがわかります。森鷗外の歴史小説といわれるものは、過去の史実にその素材を求めているといわれますが、それが作者の思想によりろ過され、組立て直され表現されると、その素材が時代を越えて、私達に何かを問いかけているような気がするのです。「阿部一族」という小説も、作者は当時の乃木將軍の殉死事件に刺激されて、素材を過去に求めて、小説を通じて社会の人に、問題を投げかけたものと聞きました。もう一度読み直してみたいと思っています。

社会へ出て、さらにいろいろな経験をするに従い、同じ本を読むにしても、10年、20年たってもう一度読み直してみたいような本をふやしていきたいと思っています。



書道部に入部して

経一本 村隆 徳

書道部に入部して、はやくも二ヶ月をすぎようとしている。まだ日も浅くほんとうの書道部のよさというものも、はっきりわらないまゝ今は、たゞクラブ内の雰囲気慣れようとする気持ちでいっぱいである。そのような状態の私が、言うのもおかしいけれど、「大学の書道部」と「高校の書道部」とでは、それはどうい比べものにならないほどの、差があることをしみじみと感じさせられた。

それは、何かと言うと、先ず、「書道」自体、高校の時やってきたのは、今ながらにして思うと、まったくの「お習字」であったと言うことである。では「お習字」とは何であろうか。私のイメージでは、正座をして先生からいたゞいたお手本を、そっくりそのまま模写しようと、ハネなどをかすれもないように書く。看板と同じようなもので、つまり「字」が死んでいるのである。ではいったい「書」とは何であろうか。私もよくわからないが、気脈が通っていて、字がまるで一つの生き物のように、いきいきとしている。それを見ていると自分の心に、すがすがしく感じられる。また、「字」一字一字を見ると変な形をしているけれど、全

私のサークル観

体から見ると、その変な形がおかしくなくなり、かえて白と黒の調和というものが、はっきりわかってくる。これは、「書」という全体から見ると、ほんの一部分にすぎないけれど、一応このようなものであらうと私は思う。

しかし、実際の問題としてやはり考えさせられるのは、書道部内の部員同志の交流関係または、クラブ自体の活動力の違いということである。確かに、大学のクラブともなると規模も大きく、個人個人の考えというものも、多種多様であるということは、言うまでもない。はじめての経験の書道部コンバなどは、実に楽しいものであった。お互いに酒をくみかわし、初対面の人たちとも、まるで旧友の仲のように親しく話せる。このコンバについては、これを終えた今では、私は、大学において、コンバは何か必然的なものとして考えさせられるようになった。その点、高校の時に比べて、大学のよさでもあらうと思う。部員同志の人間関係、つまり、先輩後輩の関係というものは、高校の時以上に重視され、またより大切なものであると思う。

これからの福大書道部での四年間で、はたして「書道」と「人間関係」とを、うまく両立させていけるかどうかは、心配であるが、そこは自分なりに努力していこうと思っている。これからの福大書道部が、大いに発展することを願ってやみません。

経三 岩 切 題 吾

私は、書道部に現在まで席を置いているが、一つ自分の心の中に大きな罪を犯している。それは、未だに退部しないで毎日の生活に甘んじているからだ。毎日の様に、私は疑問を感じながら生活している。つまり、書道部の私にとっての存在意義である。私は、一人の部員として、又言論の自由権を有した一人として、主張したい。もしや、己の心の中に何かの矛盾を感じたならば、その生活の場を遠ざかる事だ。そして、その生活を見やり、何かの思いを抱く事であらう。それから、新しい何かを始める事が最大の徳と思う。

書道部に居て平凡に四年間を送る人間よりも一年間だけでも、その時間得たものがあるならその方がどんなにかすばらしい事だらう。要は過ぎてゆく一刻一秒を大切に生きて生きる事だ。そして、理想と更にその試みとをいつも心の中に持ち続けて欲しい。今の私は、その理想を他のあるものに依って破壊されつゝある。それは、初めに書いた罪の事だ。つまり、多くの矛盾が、そうさせる。私は、純粹な心を維持させませんが為にもその場をのがれようと思策にふける事さえある。

最後に、書く事を苦痛と感ずる人も部員としての資格はない。ゆうれい部員等という言葉が消滅しない限り、書道部の自主的活動というものは、真に在り得ないであろう。

以上が、私の今のサークル観。

常人の鬱積

法四松 元 幹 倫

私が書道部に入って四年目である。僭越ながらもこゝらで書道部について書かされて貰おうとしたのではあるが、意識の方が先行して文が追っていかず、中々空転が多過ぎる。詰まる所、頭悩の歯車が噛み合わないながらも思いが滑り出したのである。

自由思想が隈無く伝播されている現今の行動の以て来たる所以には、何かしら余りにも感情が中心に底流しているように思われる。世の中は全て根本から女性化していくのではないか？ 母体から精神的離乳が行なわれていないのではいか？ (時として女性の肝心な行動に於ては感情が支配するから。また、母体からの精神的離乳が行なわれてないということは、女権の支配下に置かれるが故、女性的行為の傾向を帯びがちであるということの意味している。)

人間社会という枠に包含される様々の集団の世界には個人の自

由意思という自由思想の理念を表に押し出して、その門口を開いている。自由意志とは、いかに自由とは言え意志である以上志向性を持っている筈なのに、それがその日暮的な感情である曖昧模糊としたものに取って換っている。所謂、好き嫌いという感情の惹かれる度合に換ってその世界を覗いてみる。だから、土台苦難に耐え得る持続性はないのである。(もし、志向性があれば、方向づけようとする創造性があるから色んな苦渋に面してもそれなりの覚悟はある筈である。四年間という期間の前提も苦渋の一部である。) 縦しんば、耐え得たとしてもその世界を人間的な集団として伸展させようとしなさい。こういう者は、唯々己のヒロイック性をアベリチフとして溺没している。これは確かに己の感情を満足させては呉れるが、唾棄したくなるほど汚らしいエゴイックナルシズムである。程度の差はあれ、今の書道部の世界も然りである。本来あるべき書道の世界とは、簡単に私流に極言さして貰うならば、人間本来の感情を失いつゝある合理的科学の世界に於て『人の潤いとは？』という人間の思考で尺度できないものを精神、芸術という素朴な両面で訴え問掛けている世界で、飽迄も謙虚で地味な世界と思っているのである。それなのに私達の書道部には滔々として街気が伴っている。(書道界そのものにも、色んな展示会の在り方、つまり、作品で訴え問掛けるというのではなく、ヒロイック性を内在するところの優劣決定の競争展的性格を持っているというところに疑問を感じるのだが……) 私の

一考するところ、芸術とは「知る人が知る」で必ずしも万人の共通するものではなく、また万人が中々解り得ない所に己の無定量の喜悦があるのではないかと……。兎にも角にも、早く幼児的時代から脱却したいものである。

序文はこれ位にしてこゝに言ひ書道部という世界は曖昧な感情の集合体ではない。確かに書道部が生誕する時は好きという素朴な感情を持った者同志が集まって出き上ったかも知れぬが、今や出発点の頃の本質とは違っている。また、そうでなくてはならぬ。というのは、感情の集合体であれば暫定的な世界に終つてしまつて、人間関係が感情の結び付きだけとなつて真の人間形成の場とはなり得ない。それではどういふ集団かと言つと、結局、感情が基になつた集団から離脱し、その集まりがオルガナイズされているのである。だから、こういうことも言える。書道は嫌いだという人も組織化された秩序を踏まえて居れば、結構部員として存在し得る。これを逆にすると、いくら書道が好きでもその技術が卓越して居ても最低限の秩序が守れないようでは部員としては在り得ないのである。要するに書道部は書界と社会的集団の二面を携えて居て、後者の方により重要性を持っているように思われる。この二面に関連してこゝで我儘という言葉から、人生と部員生活との関係について考えてみたい。書道部に於て我儘は当然に許されない。我儘の心理というものは崇高な冷静沈着な思考を無視した感情が基底なる故に組織的集団の發展を止めてしまふ。そ

の上、自分の我儘を何とか虚飾して正当化しようとし、ともすればその我儘を誇負しようとする。蓋し、このような部員は反省なく、自己知らずして書道部の崩壊へと意気高々になるのが落である。人間の弱さとは不思議なもので現在、自己の不満足の焦躁的な壁に面した際、この我儘の心理、或るいは似たようなものが作用して、抽象的な糺み所のない論述である観念論的的人生観を持つてくる。そして、書道の世界は自分の人生ではないのだと……。こゝまでは良い、確かに書道の世界とは違ふ人も居るだろう。否、全員違ふのかも知れない。とは言へど、部の世界とは一致する人生でなくてはならない。その一致点が前述している最低限の義務履行である。(秩序遵守)ところが、これに反して自分の人生とは違ふというのを根拠にしてやるべきことをやらないものが時として存する。筋違いも甚しい。但、己の人生と書界が違ふという意味になるだけのことである。先程述べて居る書道部の書界と社会的集団の二面についてみると、己の人生に準じる社会的集団という側面を通して書道の域があると考えられる。即ちサークルに於ては社会的集団に内包される限定的な書界しかあり得ないのではないかと……。その意味で、社会的集団という側面の方が重要ではないかと述べて居る理由である。

サークルが社会的集団としての概念を持つ以上、運営上どうしてもそれ携わる役者が必要となる。機関誌第十二号で書いて居るのだが、いかに民主的人権尊重の時代到来と言へども社会動向は

私一部に拠ってなされるというのが社会集団の現実で、どのように自覚的に粉飾しようとも尋突である。また、この事実を認めなければ集団の動きは止まって終り。個々が互いに偽善的自己満足の尊重を図ってみても相互間だけに満足感が残るだけであって、果して大局的な集団の発展というのがあるだろうか。そうかと言って先導すべき役者、つまり集団の志向性を創造しなくてはならない一部の者が余りにも自己を押し出すと独善的になり、結果的には民主的集団の発展の障害となり、彼等はヒロイック性に埋没するだけである。要するにイニシアティブを取る者は自己を棄て、先導の道化師となるべきであって、(この意味で役者と表現している。) 少くとも部の運営に於ては部員に迷いを見せてはならない。先導すべき立場に在るが故、部員に対して人並の人間の弱さは見せられないのである。見せたが最後、先導力を失い組織的集団としての根本は崩される。ところがどうだろう、今の部には昏迷が見られがちである。正常な意識が滅失して終い、どのような方向に動いているのか一向に解らない。一体、何が原因か? 臆測ながらも考えたのだが、民主的思想の取違ひではないかと……。部員の人権の尊重、所謂各自の自主的姿勢に待つという運営であっては僅か一年間の運営にどれだけ成長が見られるのであろうか。一年後の新役者にバトンタッチすると、現在の役者が過去から踏襲している困難にまたぶつかり、常に初歩的段階で躓くのである。各個人というのは皆が自覚するほど偉くはなく、またそ

れが故に組織的運営が必要になるのではないか。民主的とは役者を選ぶ段階で生きて来るのであって、部員各個人の権限を委ねた以上、運営履行の段階では最早生き得ないものではないか。役者に選ばれた者はその立場を承知した以上、只己を信じ、迷わずに履行することである。その結果民主的方法で以て再度部員の采配を甘受すれば良いのである。普通の部員は部以外の学生生活に役者より甘い余地が残されるわけで、大体が部に対する意識がない。この現実をみると、運営とは現時点に生きる思考が支えとなる故、現実を分析して志向を定めるべきものであって、理想的観念的民主主義は成り立たない。真に想うとは予見を以て現在を知ることと思う。いみじくも、理想という絶体的美珠で以て自己を虚飾しないことである。これ迄解り切ったことを必要以上の説明で述べてきたのだが、解り切ったことが故に中々、其々は本気になつて考えようとしない。人の意見を聞いてそれは解り切ったことだと片付けて、それで終る。常に受動的で他には誹謗するが己は批難を受けないという狡猾な生き方である。書道部は、街い、迷い、感傷的雰囲気多過ぎる。人間は脆弱なるが故、強く生きたいものである。その安らぎとしての甘えは組織的集団に甘えるのではなく他にその対象物がある筈である。時流の変遷は激しく、厳しい。兎角、人間のうつろい易い易い心情はその速さに負けがちであるが、対人間の研磨に拠り自己の根本を失わないよう成長しようではないか。我々は大人であり、面前にはやるか否かがあるのみだ。その究極的判断は自己に還るのみである。

福岡大学書道部規約

第一章 名称及び目的

第一条 本部は福岡大学学術文化会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条 本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すと共に書道文化の普及、書技の向上を目的とする。

第三条 本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

- 一、書道に関する事業
- 一、書道に関する調査研究並びに機関誌などの刊行
- 一、関係諸団体との親睦ならびに連絡提携
- 一、各種展示会出品
- 一、その他前条目的達成のため必要と認めたる事業

第二章 組織

第四条 本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条 本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条 本部は次の機関を置く。

- 一、役員会
- 一、部員総会
- 一、OB会、但OB会規約は別に定める

第三章 役員会

第七条 役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。

第八条 本会は原則として、第五条に基く役員によって構成される。但、第五条に基く役員以外であっても幹事が認められた場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条 本会は幹事によって召集され代表される。

第十条 本会は毎月一回以上開くことを原則とする。

第十一条 本会の議決は、部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章 部員総会

第十二条 本会は本部の最高議決機関である。

第十三条 本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条 本会は必要に応じてこれを開き、幹事がこれを召集する。

第十五条 本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

- 一、本部会は部員の過半数を以って成立する。
 - ② 本会会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可否同数の場合、幹事がこれを決定する。
- 但、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定には、

重要事項
決定

出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十七条 本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成を以

って仮議決することができる。但、

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

二、重要事項は仮議決することはできない。

第五章 役員

第十八条 役員構成は第五条に同じ。

第十九条 第三条に基づき、外部関係諸団体へ役員を派遣することができる。

第二十條 幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

第二十一条 本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行なう。

但、委任状は認めるが、委任の方法は年度によって異つても良いものとする。

第二十二条 本部の役員の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

但、役員改選後、翌年三月三十一日までは代行期間とし、その責任は新旧役員の連帯責任とする。

尚、欠損が生じた場合これを補充する。

第二十三条 役員改選は原則として十月に行なう。

第六章 役員の仕事

第二十四条 役員の仕事は次の通りである。

一、幹事は部務を処理し、部を統括する。

又、部の代表責任者であり、その責任を學術文化会と部全体に負う。

一、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。又、福岡大学書道部OB会の事務を担当する。

一、会計は部員徴収並びに部費予算に関する収支の記録決算書を作成。

一、企画は第一章第二条に定められた、本部の目的にそつて諸活動を企画する。

一、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の徴収保管をなし、機関誌の発行を行なう。

但、機関誌の発行は年一回以上とする。

一、第五章第十九条に基く役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

第七章 会計

第二十五条 本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第二十六条 本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

第二十七条 会計報告は会計が行なり。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告書を作成し、これを報告する。

第八章 部員の権利義務

第二十八条 本部の部員は次の権利を有する。

一、本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

二、本部の部員総会に出席し、その議決に参加すること。

三、本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。

四、本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条 本部の部員は次の義務を負う。

一、部員は部員総会に出席すること。

但、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

二、部員は部費その他の所定納入金を定期に納入すること。

三、本部の規約に従うこと。

第九章 入部・退部

第三十条 本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学文会登録及び入部金納入を以って部員とする。

第三十一条 本部の退部は書面を以って幹事に願ひ出て、役員会の承認を得、部員に通達する。

但、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納する。

第十章 罪 則

第三十二条 書道研究する熱意なく本部の名譽を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。

但、欠席届提出者についてはこの限りではない。

第十一章 規約改正

第三十三条 本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。

尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要とし、その出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附 則

附 一 本規約は、昭和三十五年十一月一日より実施、昭和四十五年四月一日改正。

△ 編集後記 ∨

＊ 機関誌発行にあたり、御協力戴いた方へ心から感謝します。

＊ 夏期のスケジューも大分つまっておりますが、部員の皆さん、元気で過して下さい。

荒 鷲 第十三号

福岡大学学術文化部会 書道部機関誌

昭和四十七年七月五日発行

編集責任 八 尋 博 基

平 田 順 子

印刷所 福岡市中央区大名一丁目七番二号

福 岡 タ イ プ

TEL (七七) 一六〇四